

コンディヤックの教育思想

—『パルマ公国王子のための教程』の分析から見る人間観

(平成 27 年 8 月 31 日提出, 平成 27 年 10 月 20 日受理)

The educational thought of Condillac

—An analyze of *Cours d'étude pour l'instruction du prince de Parme* and the image of human

大阪物療大学

中田 浩司

NAKADA Hiroshi

Osaka Butsuryo college

キーワード：コンディヤック, 18 世紀, 教育思想, 『パルマ公国の王子のための教程』

Abstract : Étienne Bonnot de Condillac, French philosopher of the eighteenth century and founder of sensualism, was appointed preceptor of the Infante Don Fernando Parma in 1758. He was in charge of his education until 1767. After this important mission, Condillac, in 1775 published study courses for the instruction of the Prince of Parma, a tremendous work in 16 printed volumes. He presented his educational thought and the content of his teaching. In this article, we would like to highlight the axis of the educational thought of Condillac, specifically analyzing the method that this philosopher has proposed. First, we will present the situation and the physiognomy of Parma at that time as a preparatory study, mentioning the appointment's history and the pedagogical activity of Condillac. We will then make a brief introduction of the *Study Course for the prince of Parma* statement related to *the Mirrors of princes*, traditional literary genre in Europe. Secondly, we propose to analyze the pedagogical situation that Condillac criticized in the eighteenth century. According to him, the education process at that time was only meant to provide basic knowledge or general principles, requesting the memory only. Finally, we will try to identify the main idea of Condillac's education, an education that aims to engage children in the observation and reflection. Is the sensualist really attaching importance to make children acquiring an art of thinking so he can train not passive but active and autonomous subjects?

Keywords : Condillac, 18th century, Educational thought, *Study Course for the prince of Parma*

1. はじめに一問題の所在と課題の設定

我が国において, 18 世紀フランスの教育思想を考察するときに, まっさきに俎上に載るのは, ジャン＝ジャック・ルソー (Jean Jacques Rousseau) とその教育思想である。とりわけ, 彼が書いた小説形式の『エミール』(*Emile ou de l'éducation*, 1762) は, 知育偏重の風潮に反対し, 自然や事物による教育, 子供の自発性の尊重と経験による教育の必要を説くとともに, 子供を自然の発育に任せ, 教師はただ外部からの悪い影響を防ぐといういわゆる消極的教育を主張した。そして近代教育思想の礎を築いたとされ, 教育学上の新思

想の創始者となったとされている。

また, 18 世紀のフランスは, 教育学の研究のみならず, 教育制度が大きく改革されていく時期でもある。1789 年のフランス革命以降, 同年 8 月には「人権宣言」が発せられ 1791 年には, フランス憲法が公布された。このような政治的改革の中で, それまで公的な教育の機会を得ることのなかった市民への教育が配慮されていく。フランス憲法第一条は次のように規定されている。

すべての市民にとって共通な公教育制度, しかも
そのうちすべての人間にとって不可欠な教育機関

については、無償の公教育制度を創設し、組織する⁽¹⁾。

このような憲法における規定が後押しし、1791年9月、革命期の政治家であったタレーラン（Charles-Maurice de Talleyrand-Périgord）が立法議会に提出した教育プラン以降、1795年10月の国民公会に提出されたドヌー（Pierre Daunou）のプランに至るまで、提出された公教育プランは、10以上を超え、提出先も、立法議会・立憲議会・国民公会へと質を変え、基本性格もジロンド党系のものからジャコバン党系のものへと変わり、また、可決されたもの、審議未了となったもの、提出されただけのものなどさまざまであるが、いずれにせよ、公教育制度を整備し、民衆への教育の機会を与えることが、18世紀フランスにおける最も喫緊かつ重要な課題となった⁽²⁾。このような記述は、いわば、西洋教育史、西洋教育思想史の「中心」であり、その重要性は反論の余地がないであろう。しかし、そのような「中心」において記述される教育思想、教育制度のみを視野に入れることは、18世紀フランスの教育学や教育思想の包括的な理解を妨げることになるであろう。実際、ルソー以外にも多くの哲学者、例えばコンドルセは、公教育計画を発表したし、『百科全書』を執筆したディドロ（Denis Diderot）は、ロシアの女帝エカチェリーナ2世（Екатерина II）と交流し、ロシアにおける大学計画案を提出した。また、経済学者、重農主義者として知られるテュルゴ（Anne-Robert-Jaques Turgot）もラ・シャロット（Louis-René Caradeuc de La Chalotais）の国民教育思想に強く影響⁽³⁾を受け、教育の国家的組織化を企てた。つまり、このような一連の歴史の中で当時の政治家、哲学者によって多数の公教育計画が立案されたのであり、それらは枚挙にいとまがないほどである。しかし、制度的に定着しなかったものが大半であり、いわゆる中心的な西洋教育思想史には記述されることが少ない。それゆえに、このような教育者や哲学者たちの言説を詳細かつ綿密に紐解いていくことが、18世紀フランスの教育学や教育思想の包括的な理解を可能にさせるとともに、彼らの著作が、今日教育の分野で生じている問題に対して処方箋を与えてくれる可能性も持っているのである。

このような問題意識から、本論稿において、18世紀フランスの哲学者エチエンヌ・ボノ・ド・コンディヤック（Étienne Bonnot de Condillac）の教育思想を取り上げることとしたい。なぜコンディヤックという哲

学者を取り上げるのかという理由についてはのちに述べるが、まず、コンディヤックについて、前述の同時代人であるルソーやディドロ、コンドルセに比べるとその知名度たるや雲泥の差である。したがってまずその簡単な伝記的事実と哲学的観点を紹介することから始めよう⁽⁴⁾。

フランス南東部の町、グルノーブルに生を受けたコンディヤックは、生来、視力が弱く、12歳になるまで文字を読むことができなかったと言われている。そのため勉学を開始したのが遅く、1730年以降、実兄のジャン・ボノ・ド・マブリ（Jean Bonnot de Mably）に引き取られてからであった。しかし、生まれつきの才能によって、コンディヤックは、短期間で、素晴らしい進歩をみせた。

1733年以降パリに出て、本格的な勉学を開始する。コレージュ・マザランにおいては、数学・物理学・論理学・デカルト哲学など、当時の最先端の知を吸収し一方で、サン・シュルピス神学校とソルボンヌ大学において神学やスコラ哲学といった伝統的な学問を修めた。そして1738年下級司祭、1739年上級司祭の資格を得る。1739年8月、ソルボンヌ大学において神学の学位を取得するための論文を完成。1741年司祭職に就任した。しかし、コンディヤックの関心は、神学よりも科学や哲学にあったとされ、これ以降もパリにとどまり、ジョフラン夫人やデピネ夫人などが主催するサロンに顔を出し、同時代人であり、2歳年長のルソーや1歳年長のディドロなどの哲学者と交わった。特に、彼らとは、ルソーがその自伝的著書『告白』（*Les confessions*）で述べているように、パリで頻繁に顔を合わせていた。また、三者は、ともに昼食を取りながら議論を重ねたという⁽⁵⁾。さらに、ルソーは、コンディヤックの最初の著作である『人間認識起源論』出版のための出版社を紹介したと述べており、いわば、コンディヤックにとってルソーは、学問上の盟友であったといえる。その後、のちに述べるようにパルマ公国の王子の家庭教師に就任し、パルマ公国の王子の教育に専念した。この職を辞したのちは、アカデミーフランセーズ会員に選定されるも1773年ころからパリ南西部の町ヴォージュンシー近郊に城館を購入し、1780年に死去するまでそこで暮らした。

次に、哲学的な観点から述べるならば、コンディヤックは、英国経験論者ロック（John Locke）の思想を忠実に継承しつつ、感覚論の祖として、その後の「イデオログ」（idéologues 観念論者）たち、あるいは

「スピリチュアリズム」に大きな影響を及ぼした。主著として、『人間認識起源論』(*Essai sur l'origine des connaissances humaines*, 1746) や『感覚論』(*Traité des sensations*, 1754) といった主に人間の「精神」の働き、別様に言えば、のちに心理学として発展していくような学問領域を考察したもの、あるいは言語と思考の関係について考察したものが挙げられる。しかし、コンディヤックをフランス啓蒙期における哲学者あるいは言語思想家としてのみ捉えることは、彼の思想の包括的な理解を妨げることになるだろう。というのは、先に述べたように、彼は、1758年から1767年までパルマ公国(Le duché de Parme)の王太子であり、ルイ16世の皇太孫であったフェルディナンド公(Prince Ferdinand)の家庭教師(précepteur)としてその重責を担い、学問上の指導者として活躍した。その後、その成果を『パルマ公王子のための教程』(*Cours d'étude pour l'instruction du prince de Parme*, 以下『教程』)に記し、自らの教育論を展開した教育学者としての側面を持つからである。

従来、コンディヤック研究は、フランスにおいても、日本においても、研究がそれほど盛んではなく、フランスにおいてもその著作が絶版となっており、資料にアクセスできないという状況が長く続いた⁽⁶⁾。また、日本においても、戦後すぐ、加藤周一の手によって主著の一つである『感覚論』が翻訳され、1990年代に入り、古茂田宏によって『人間認識起源論』も翻訳されたが、その研究は、もっぱら哲学、特に、その認識論や言語論を取り扱ったものが多く、教育論を扱ったものは筆者の知る限りほぼ皆無である。したがって、本論稿においては、コンディヤックの教育者としての側面に光をあて、その教育論の再評価を図り、18世紀フランス教育思想研究の新たな地平を開こうとするものである。

ところで、先述のように、コンディヤックの教育論に関して、日本語で書かれたものはほぼ皆無であり、その教育論について人口に膾炙しているとは言い難い。したがって、その教育論を論じるための端緒となる本稿において、筆者は、コンディヤックの教育思想の予備的考察にもっぱら力を注ぐこととしたい。そのために、次のような方法で、本稿を進めていくこととしたい。まず、コンディヤックが家庭教師として赴任したパルマ公国の当時の状況、および彼が家庭教師として選任された経緯やそこでの活動を確認し、次いで本稿における主要なコーパスとなる『教程』の概略の説明を行い、彼が当時の教育に感じていた問題点を

抽出すること、およびその問題点を通じて、自らどのような教育を提言したのか、そしてそこからどのような人間を育成しようとしたのかということを提示したい。より具体的には、コンディヤックの教育論の中心的著作である『教程』における「序論」(*Introduction au cours d'études*)の中のとりのわけ、「緒言」(*Discours préliminaire*)と題されたテキストを主たるコーパスとしながら、彼の教育論、特に教育方法を見ることを第一の目標としたい。

2. 予備的考察

2-1. パルマ公国について

本節においては、コンディヤックが赴任したパルマ公国の当時の状況の概略を確認しよう。パルマ公国は、イタリア北部に位置し、1511年ローマ教皇領となった。次いで、1545年、教皇パウルス3世(Paulus III)が息子であるピエル・ルイジ・ファルネーゼ(Pier Luigi Farnèse)にパルマと同じく教皇領であったピアチェンツァを分けて建国したのを起源としている。以後、1545年の公国成立から、1860年のイタリア統一まで315年続いた。

1545年の公国成立以来、先述のファルネーゼ家の統治が続いた。しかし1731年、ファルネーゼ家の男子相続人が途絶え、エリザベッタ・ファルネーゼ(Elisabetta Farnèse)の嫁ぎ先であるスペイン・ブルボン家がパルマ公国を相続し、彼女とスペイン国王フェリペ5世(Felipe V)の王子であるフィリッポ公(Don Philippe)が後継者となりパルマ公国を統治した。そして、1751年フランス国王ルイ15世の長女であったルイーゼ・エリザベト(Louise Elisabeth)とフィリッポ公の間にフェルディナンド公が生まれ、このフランス国王の孫にあたるフェルディナンド公の教育という大きな使命をコンディヤックが後に、家庭教師として担うのであった。

パルマ公国は、その規模が非常に小さく、さらに、財政難であったがゆえに、スペインとフランスの両ブルボン家に、経済的に多くを依存したのであった⁽⁷⁾。また、他のヨーロッパ列強諸国との権力関係においては、チェスの駒のような存在でしかなかったがために、その国力は他国からの影響を受け、非常に脆弱なものであった。

このような経済的にその力が劣るパルマ公国であったが、自由主義的な思想を持ち、啓蒙思想に大いに賛同していたフランス人ギヨーム・デュティヨ

(Guillaume Dutillot) が招聘され、国務長官ならびに財政長官として数々の改革を担った⁽⁸⁾。そのことにより、イタリア諸国のなかでも特にパルマ公国は、教会勢力が強く、聖職者は財政力とさまざまな特権をもっていたが、「デュティヨの改革政策は特に教会に向けられ、聖職者の諸特権を制限し、イエズス会の追放を実現した。またフランスの啓蒙思想家を招いてサロンを開き、教育改革にも力を注いで文化の興隆に尽くした⁽⁹⁾」とされている。さらにデュティヨはその在任期間中、「行政組織を近代化し、工場を作り、文化芸術を奨励した⁽¹⁰⁾。」また、同時に「優秀な人材や芸術家、職人をパルマに招聘し、住まわせ、宮廷内はフランス人の職人や文人たちで占領させた⁽¹¹⁾」と言われている。そして、前述のようにフィリッポ公の妻で、フェルディナンド公の母であるルイーズ・エリザベトがフランス出身ということもあり、したがってこのような状況のパルマ公国内においては、フランスの学問、文化、芸術が庇護され、あるいはその生活様式においてもその影響が相当強かったと推測されるであろう。とすれば、このいわば、フランスの影響を大いに受けた公国の環境において、公国の王子にフランス風の教育を施していくことは必然的ななりゆきであり、またコンディヤックというフランスにおける当代随一の哲学者、知識人が、フランス的な環境に満たされたイタリアの小さな公国の家庭教師として選定されるのも自然なことであろう。

2-2. コンディヤックの選定について

次いで、コンディヤックがパルマ公国のフェルディナンド公の家庭教師に選定された経緯について確認しよう。

コンディヤックを選任するにあたっては、ローマの大使であり、哲学者たちの庇護者であったニヴェルネ公(Duc de Nivernais) およびフランス史料編纂官(historiographe)であったデュクロ(Duclos)の推薦と尽力があったといわれる⁽¹²⁾。この頃、コンディヤックはすでに『人間認識起源論』や『感覚論』、そして『動物論』(*Traité des animaux*, 1755)の刊行により哲学者としての名声を築いており、フランスの知的な世界では、当代一流の哲学者とも形容されていた。しかし、一方で、彼のキリスト教の教義の独自の解釈をめぐる、特に博物学者ビュフォン(Georges-Louis Leclerc, Comte de Buffon)との間で論争が起っていた。さらに、「反教會的な哲学者たちとの付き合いも深かったコンディヤックを選任することには反対意見もあっ

た⁽¹³⁾」が、彼の招聘を最も強く望んでいたのは、フェルディナンド公の母親であるルイーズ・エリザベトであるといわれる。彼女は、夫であるフィリッポ公に宛てた手紙で次のように記している。

彼の宗教について、私は最も良い情報を複数の人物から得ました。すべての情報は私たちが望んでもよいものでした。やや形而上学的な書物があるとはいえ、私が思うに、この選択について何も非難すべきところはありません⁽¹⁴⁾。

ここで、「形而上学的な書物」と表現されているのは、1754年に出版された『感覚論』、およびその翌年の『動物論』を指すのであろう。コンディヤックは、とりわけ『動物論』においてデカルトやビュフォンたちの主張する「動物は心をもたない自動機械にすぎない」といういわゆる動物機械論を反駁し、動物に魂を認めるという、当時のキリスト教の教義から見れば、異端として解釈出来る見解を提示したが、このようなコンディヤックの宗教およびその信条や解釈に関しては、懸念すべき事柄はあったものの、最終的にはコンディヤックに全面的な信頼を寄せ、その選択を正当化している。また、彼女は同じ書簡の中で、「私たちの子供は、良いキリスト教徒であるべきですが、教会博士であるべきではありません⁽¹⁵⁾」と述べ、キリスト教徒として、あるいは「神の似姿」(imago dei)として王子を成長させることは重要な目的ではあるものの、しかし、キリスト教の教義を論じる学者の教育は望んではいないのである。言葉を換えれば、彼女は、教会の学説、キリスト教の教理を教え込むというよりかは、少なくとも、ある程度は神学的な知とは独立した一般・総合的かつ世俗的な学問知によって、王子を教育しようとしていたのではないだろうか。実際、コンディヤックは、聖職者として、および神学者としての教育をサン・シュルピス神学校とソルボンヌ大学で受け、1739年には上級聖職位を取得し、1741年に司祭職には就いた。しかし、コンディヤックは、大きな経済力を持って、官位を買うことによって貴族に列せられた新興貴族の出身であり、その家の末子であった。また、そのような貴族の末子が聖職に就くというのは、当時の貴族の風習に従っていたものであり、彼の関心は、むしろ、ニュートンによって構築された新しい科学やデカルトによって構築された哲学にあったとされる。このようなコンディヤックのそれまで受けた教育や経験を考慮するのであれば、神学的な知識を保持しつつ

も、一般的、総合的な知識を持っているがゆえに、フェルディナンド公の母親であるルイーザ・エリザベトにとって、自分の子息を任せる家庭教師として適任と判断されたのである。こうして、コンディヤックはフェルディナンド公の家庭教師として、選任されたのである。続いては、コンディヤックのパルマ公国への赴任およびそこでの活動について確認しよう。

2-3. コンディヤックの赴任と活動

上述のような経緯から、コンディヤックは、フェルディナンド公の家庭教師として選定され、1758年4月12日にパルマに赴任し、当時7歳であったフェルディナンド公の教育に着手した。以後、1767年までの約9年間の長きにわたって、パルマ公国において家庭教師を務めることとなった。しかし、フェルディナンド公にとってコンディヤックが最初の教師ではなかった。フェルディナンド公は、すでに、イエズス会士であったトマ・フウムロン(Thomas Fumeron)より文字の読み書きや教理問答(catéchisme)の教えを受けており、初歩的な学習を始めていたようである⁽¹⁶⁾。このような教師の交替の背景にどのような意図があったのかは推測でしか言えないが、前述のように、公国がフランスを模範にしていたこと、そしてデュティヨはイエズス会追放を実現し、その一環としてイエズス会士であったフウムロンを交替させたということもあるだろうが、確実に言えることは、王子の教育の担い手が、イエズス会士を離れコンディヤックへ移行していくことは、伝統的、また真に宗教的な教育から、啓蒙の理想がしみ込んだ、革新的かつ世俗的な教育への移行であったといえるだろう。

コンディヤックは、この重要な教育的使命をパルマ公国副総督(sous-gouverneur)であったオギュスト・ド・ケラリオ男爵(Le baron Auguste de Keralio)とともに分担することとなった。ケラリオは、算術、幾何学、天文学といった主に数学、科学系の学問に関する教育を担当したが、フェルディナンド公の教育の形態や内容はすべてコンディヤックの預かるところとなった⁽¹⁷⁾。

コンディヤックの在任期間中の教育内容について詳細に論じることは、本論稿の主たる目的ではないが、その教育は、まず言語の習得から開始された。その際、「言語の美しさになじむこと」⁽¹⁸⁾が目標とされ、文学作品を通して審美眼を洗練させた。最初の二年間は、文法や作文の技術といった実用的な言語運用能力を習得し、同時にフランス文学の学習にも費やされた。三

年目が終わるころには、思考や推論の仕方を学びながら哲学的な学習へと進んでいった。そしてこの学習の後には、歴史の学習に移り、以後この教育が修了するまで歴史の学習が師弟における主要な目的となった⁽¹⁹⁾。

2-4. 『教程』について

『教程』は、コンディヤックが家庭教師の任務を終えて後、1775年に日の目を見ることとなった。コンディヤックは、フェルディナンド公の教育の進捗状況に応じて、この大きな著作を執筆していたが、任務終了から発行まで約8年間の月日がかかっている。出版が大幅に遅れたその理由は、いくつか挙げることができる。まず、パルマ司祭からの反対により、即座の印刷許可が下りなかったこと、次いで、許可が下りなかったものの、その著作の重要性から、多くの読者を獲得できる可能性があった。そのため、その原稿は、パルマから国境を超え、フランスに入り、そこからパリにおいて印刷された。したがって、地下を通り国境を越えたこと、またコンディヤックが家庭教師の任務を遂行したパルマ公国ではなく、彼の生まれたフランスにおいて印刷されたことによって相当な時間がかかったのである⁽²⁰⁾。とはいえ、この書物自体は、「18世紀から19世紀をとおして最も数多く版を重ねたベストセラー」⁽²¹⁾であったと言われている。この『教程』は、コンディヤックが実際に施した教育をどこまで忠実に再現しているかをうかがい知ることは出来ないものの、ここではその要点となる点を概略しておこう。

非常に浩瀚な書物である『教程』は、「序論」(*Introduction au cours d'études*)から幕を開ける。この「序論」は次の4部から成り立っている。すなわち「緒言」(*Discours préliminaire*)、「予備講座の主題」(*Motif des leçons préliminaires*)「予備講座の概要」(*Précis des leçons préliminaires*)「予備講座の後になされた研究の主題」(*Motif des études qui ont été faites après les leçons préliminaires*)である。この「序論」こそが、コンディヤックの教育思想を論じるうえで最も主要なコーパスとなる。というのは、そこで彼は当時の教育の問題点を挙げながら批判し、自らの教育論の中心軸を提示すると同時に、その弟子であるフェルディナンド公とともに学んだ過程、学習方法を示している。とりわけ、「予備講座の概要」において、コンディヤックは、「諸概念」、「精神の作用」、「習慣」、「精神と身体の区別」、「神の認識」という5つの項目を設け、それぞれの哲学的概念について説明を示している⁽²²⁾。またこれらの項目は、コンディヤックの著作である『人間認識起源

論』、および『感覚論』で展開した哲学概念の焼き直しとなっている。とはいえ、『教程』の「序論」は教育論や教育方法やその過程などを論じた著作であるにも関わらず、このような真に哲学的な概念について論じていることに一種の違和感を持つだろう。つまり、このような哲学的な概念の祖述や考察が王子の教育にとってどのような有益性があるのかということであるが、それは、いわば生徒にコンディヤックの哲学を理解させ、およびそれに基づいた教育が受容できるようになるための予備的教育なのであり、王子が他の知識を獲得するための準備として必要となるものである。

「序論」の後に続く著作は、その性質上二つに分けることが出来るだろう。一つめは、真に学習指導に関するもの、教科書としての役割を担っているものである。とりわけ『文法』(*Grammaire*)、『書く技術』(*L'art d'écrire*)、については、言語の規則や原理を学び、作文の方法、修辞学といった言語教育に関するものである。ついで『推論する技術』(*L'art de raisonner*)、『思考する技術』(*L'art de penser*)は、思考方法に関するものであり、哲学、特に認識論的な視野から書かれた著作であると同時に、前者においては数学および物理学の内容を含んでおり、科学的な著作であると言うことが可能であろう。二つめは、歴史研究に関するものであり、『古代史』(*L'histoire Ancienne*)および『近代史』(*L'histoire moderne*)である。これらの歴史を取り扱った著作では、古代からの史的事実を紹介しつつ、いっばうで前世紀の哲学史や学問論、文明論、政治論について取り扱っている。これらの歴史に関する著作群は、『教程』の中でも分量が際立って多く、扱っている主題也多岐にわたっている。

ところで、コンディヤックのこの『教程』は、単に啓蒙期における教育論として位置付けるのではなく、西洋中世以来の文芸ジャンルである「君主の鏡」(*miroirs des princes*)としても位置付けることが可能であろう。西洋中世以来、君主を教育すること、つまり、政治的判断に優れ、正義を体現する良き統治者を教育すること、また彼を良きキリスト教徒として教義を理解させ、有徳で思慮深い人間として育て上げることが国家における最重要の課題であった。その君主の教育を担ったのが助言者⁽²³⁾ないし家庭教師と呼ばれる者たちであった。この任務にあたったのは法学者、高位聖職者、文人、哲学者といった、「知」を体現するものたちであった。彼らに課せられた任務は大いなる重要性を持っていた。というのは、将来王位を継承する人間の政治的かつ知的な方向づけを任されていた

からであり、それはすなわち国の未来を方向づけるものであったからである。彼らは、未来の統治者に必要不可欠な統治の術、あるいは文化的な知を伝達しながら、将来の君主の精神的な指導者として君主の教育に専心し、同時に彼らの君主教育に対する考えを、「君主の鏡」と呼ばれるいわば教科書にまとめたのである。この「君主の鏡」は、西欧の文芸ジャンルとしてその位置を確立し、中世以降、おびただしい数の書物が出版された。その内容は多様性に富み、たとえば新・旧約聖書やギリシャ・ローマにおける古代の歴史的支配者を引き合いに出しながら、見習うべき教訓、君主として守るべき道徳体系を論じたものあるいは法律や政治学的な考察を論じたものがあつた⁽²⁴⁾。

このような観点から考えるなら、コンディヤックの『教程』も、フェルディナンド公の教育を通して書かれた理想の君主論を論じたものであり、18世紀における「君主の鏡」の代表的著作の一環をなしていることができるだろう。というのは、彼の『教程』は、歴史学や政治学の歴史について論じ、それらの著述には、大いなる分量を割いており従来の「君主の鏡」という文芸ジャンルとの連続性を保っているからである。しかしながら、ここで注目したいことは、従来の君主に最も必要であった道徳や統治術について、あるいはキリスト教の教義については、ほとんど触れておらず、彼に先行して「君主の鏡」を書いた作者ほど、それらの主題について重要性を与えて論じてはいないのである。しかも、『教程』において優先権を与えられているのは、先述したように、言語に関する考察、修辞法、推論や思考の方法といったもっぱら知的な考察を課すものなのである。また、『教程』のフランス語のタイトルは、*Cours d'étude pour l'instruction du prince de Parme*であったが、instructionという語は、特に「知育」に重点を置く教育を意味する。したがって次のように言うことが可能ではないだろうか。コンディヤックがフェルディナンド公の教育を通して書いた『教程』は、君主の伝統的な教育方法を論じたものではなく、あるいは人間性を陶冶していくものではなく、もっぱら知的な教育を目的に書かれた「君主の鏡」なのである。

以上、コンディヤックを招聘したパルマ公国、その招聘に関する周縁的な事柄、および『教程』の概略とそのジャンルを確認してきた。続いてコンディヤック『教程』「序論」において展開した教育論についての考察に移ろう。

3. コンディヤックの教育思想

3-1. コンディヤックの教育批判

コンディヤックが活躍したフランス、旧体制下においては、イエズス会の運営するコレージュが教育の中核をなしていた。コレージュでは、キリスト教の教義伝達および神学的知識やギリシャ語とラテン語の古典語教育が主として行われ、加えて修辞学やアリストテレスの哲学を基盤としたスコラ哲学の体系が教えられていた。この状況に対し、「啓蒙の知識人は、コレージュの有害無益な教育を、自然科学、現代語、外国語を中心とする世俗的で有用な知識を教える教育に変えることを要求⁽²⁵⁾」したのである。換言すれば、啓蒙の知識人は、コレージュのギリシャ・ラテンの古典を過度に重視した科目内容は、形式主義的で銜学主義的でむしろ有害であり、また、キリスト教の教理伝達は、いわば神の似姿としてのキリスト者を育成するのみで何らの実用性を持たないと批判しているのである。18世紀フランスにおいて、このような批判がなされる中、コンディヤックのパルマ公国王子のために書かれた教育論も、啓蒙の知識人たちがなした批判の一翼を担っているものである。実際、彼は、『教程』「序論」において、当時の教育の批判を試みつつ、また自身の理想とする教育方法を素描している。

コンディヤックは、『教程』「序論」の特に「緒言」において、彼の教育論の軸、彼独自の教育方法を展開している。彼の教育論、とりわけ、その教育方法は、当時行われていたそれとは全く類似しておらず、むしろ「技術や学問を形作っていく際に人間が行動した方法に類似している⁽²⁶⁾」という。つまり、原始の社会に生きる人間が、社会を構築し、生活に必要な技術を獲得するためのプロセスに似ている、あるいは、最初の人間たちが、技術や学問を作るためにたどってきた道をもう一度同じようにたどることであると主張する。このような方法を採用するに至ったのは、もちろんコンディヤックが当時の教育方法について何らかの不満や問題を感じていたからであろう。まず、彼自身の当時の教育に関する批判点を確認しよう。

一つめの批判点について。彼は、『教程』「序論」において、子どもの教育を開始するにあたって、当時の一般的な考えを紹介しながら問題点を次のように記している。

われわれは、子どもは、何らかの考察を要求する知識を獲得することは不可能であると想定している、

そして、彼らにそのような知識を与えるためには、われわれが物心のつく年齢(l'âge de raison)と名付けるある一定の年齢に到達するまで待つのだ⁽²⁷⁾。

ある程度の成長を待ち、「物心のつく年齢」に到達することができて初めて、子どもはやや複雑な思考を必要とする知識を獲得することができ、そこから教育が開始されるのである。とはいえ、この「物心のつく年齢」については、何歳から始まるというような固定や線引きはされておらず、「人生において突然天賦のものとして与えられる瞬間が存在する⁽²⁸⁾」と言われていた。すなわち、科学的根拠の存在しない、いわば偏見にも似た考え方が通用していたのである。しかも、「物心のつく年齢」は固定されておらず各人の発達段階にも左右される以上、それは非常にあいまいなものである。したがって、教育者の側から見ても、それに到達した瞬間を見出すことは難しく、また、子どもの側も適切な時期に適切な教育を受けることが難しかったと推測されるだろう。

このような偏見に対し、その原因を技術や学問の成立を引き合いに出しながら、コンディヤックは次のように推測する。「原始社会においては、技術も学問も存在しなかった。すべての知識は、必要により為された観察に限られて⁽²⁹⁾」いたが、「観察があらゆる種類において増加した際、それを序列化し分類した⁽³⁰⁾」社会の起源における人間は、技術や学問を持ち合わせていないがために、彼らにとって可能だったのはただ観察することのみであった。しかし、この観察の結果は、もちろん知識の蓄積を可能にした。また、単なる蓄積だけではなく、それらを整理し、分類することが求められたのである。加えて、このような知に関する「分類において何も混同しないために、人が為した観察を一般的な原理に単純化した⁽³¹⁾」のである。そして、この単純化された一般的な原理によって、「あらゆる知識は簡略化された方法により説明される⁽³²⁾」ようになった。換言すると、知識の獲得およびその整理や分類という過程を経て出来上がった簡略化された方法こそが、ひとつの技術であると言えるのである。そしてこの簡略化された方法の教授をすることが教育であったのだ。

しかし、それを用いた教育が効果を発揮するのは、観察を行い、その所見を原理に還元をした者たち、そしてある程度の教育を受けた者たちに対してであろう。にもかかわらず、この方法が他の人間にも普遍的に適切かつ有効であるものと判断してしまったこと

により、「われわれが教育を望む無知である者としての子どもたちを、観察から観察へと導かないで、子どもが既にある程度の教育を受けたものとしてその教育を始め、もはや彼らの知識を序列化するのみであるとしてしまった⁽³³⁾。」そして、子どもたちは、一般的な諸原理を発見した者たちと同じように扱われ、それを教授されたが、理解することは不可能であった。なぜなら、一般的な原理は、子どもたちには課さなかった観察を前提としているからである。なおかつ、このような経緯が、子どもは、何らかの観察を要求する知識を獲得することは不可能であると想定し、そして、彼らにそのような知識を与えるためには、物心のつく年齢(l'âge de raison)と名付けるある一定の年齢に到達するまで待たなければならないという偏見を生んだと指摘する。これがコンディヤックの第一の批判点である。

次いで、彼の指摘する当時の教育の第二の問題点に移ろう。同じく「序論」において、「私は記憶力しか養成しない教育は、非凡な人物を作ることができ、現にそのようになっているということを認める⁽³⁴⁾」そして「記憶力をなおざりにするべきではない⁽³⁵⁾」と述べている。当時、イエズス会のコレージュなどであまねく行われていたギリシャ・ラテン語の古典作品の暗唱し、文芸的教養を身につけること、また暗記を中心にした一方的に知識を詰め込んでいくという教育方法については、それが非凡な人間を形成するためには有益であるということに一定の理解を示す。また、「子ども時代においては、最良の学習が不可能であり、したがって非常に大切な時間を失わないためにも、どんな方法であっても記憶を満たすことを急がなければならないだろうとわれわれは判断する⁽³⁶⁾」と述べ、記憶中心の教育は最善ではないが、それなりに成果をあげており、やむを得ない方策として実践されているとしている。また、

子どもが物語の長い一節を何の知性もなく暗唱したり、自ら言っていることをいまだ理解することなしにいくつかの言語を話したりするときに、われわれは驚嘆の声をあげ、子どもを賞賛する⁽³⁷⁾。

と当時の一般的な通念も紹介している。しかしながら、記憶力のみを養成する教育は有益でありながらも一方で欠陥があるとして、彼は次のような批判を展開する。すなわち、そのような教育では、「忘れるべき無駄、破壊すべき偏見、修正すべき誤謬概念⁽³⁸⁾」し

か獲得することが出来ない。そして自分の獲得した知識に偏見や誤謬があるなれば、いつの日かそれらを修正し、あるいは、忘却して、再び新しく正しい考えを身につけていくことが余儀なくされる。しかもこのような一連の作業は、非常に骨を折る作業となり、さらに、「理性の発達および進歩を妨害する⁽³⁹⁾」がゆえにかえって有害なものとなるのである。そして、記憶力のみをもっぱら鍛えた者は、つまるところ暗記しかできない者であり、いわば「何も知らない者⁽⁴⁰⁾」なのである。従来の教育法、とりわけ、17世紀18世紀におけるフランスのコレージュで実践されていた伝統的な教育法は、ただ単に、覚えることあるいは記憶することが重視されており、とりわけ、人文主義的な知識を詰め込むだけであった。そのような教育では、確かに知識をたくさん身に付けた博識な人間を教育することは可能であっても、結局は暗記しかできない者であり、無知な者でしかないのである。コンディヤックは、この記憶力を養成することのみを目標とする教育に対して批判の目を向けている。コンディヤックによれば、コレージュにおける伝統的な教育とは、「偏見」によって成立しているということである。つまり、子どもたちは十分に思考するほどには知的に成熟しておらず、したがって、推論することはできない。唯一できることは「覚えておくこと」である。教育というものが、記憶させることをあまりに重要視しすぎるあまり、そしてそれに立脚し、記憶力のみを鍛える教育は、知識のみを与えることにしかない。このような教育は、知識をたくさん持った博識な子どもを育成することには非常に役に立つであろう。また、このような教育によって得られた知識は、いつの日か、子ども自身にとって有益となる可能性を秘めている。しかし、このような教育は、重要な視点が抜けているのである。つまり「考える」ということ教えないということである。記憶や暗記によってしか物事を知らない者は、何事も知らないということである。

以上、コンディヤックの当時の教育法に対する批判点を見た。一つは、子どもたちは、何らかの考察を必要とする知識の獲得が不可能であり、したがって「物心の付く年齢」と呼ばれる年齢まで待たなければならないという偏見が生まれていること、および記憶力を鍛える教育が行われていることであったが、このような教育は、いわば知識を伝授するだけの教育であり、そこからは自ら知識を獲得することを欲する能動的な学習者ではなく、受動的な学習者しか生まれないであろう。

3-2. コンディヤックの提言

では、このような批判からコンディヤックは自ら理想とする教育法をどのように展開していくのだろうか。コンディヤックが批判したのは、一般的な原理は、観察をすることなしに理解することはできず、そもそも子どもにそれを理解させることは不可能であるということであったが、反対に、子どもに観察することを推奨すれば、一般的な原理を身につけることは簡単になるはずである。またそのことによって、物心の付く年齢が早く到来することになるのではないだろうか。また、第二の批判は、「記憶中心の学習」であったが、結局このような学習は、子どもに何らの思考も要請しない受動的なものであった。だとすれば子どもに思考を積極的に要請すること、および、知識を能動的方法によって獲得していくことを養成することによって、つまり、知っていることから観察を開始し、次いで知らないことを観察していくというプロセスは、すでに完成してしまった体系をそのまま教えることではなく、自らそれを構築しようとすることであり、社会の始まりに生きた人間たちが知識を獲得していったプロセスと類似しているのである。また、このような機会を与えられた者は、もはや単に知識を教授されない状況に置かれる、つまり必然的にそれを獲得することを要請される。そして知識を獲得するような素材を与えられ、それを獲得する方法を自ら学ぶ、あるいは、思考することを学ぶのである。言葉を換えれば、自律的な学習者として、知識を獲得する方法や思考法を体得できるのである。そしてこのことが、コンディヤックの教育方法においてもっとも重要視されるのである。さらに、このような教育方法は、次のような利点を生み出すのだ。

われわれの学習から、われわれを教育することではなく、われわれを立ち止まらせるおびただしい数のよけいなものを取り除く、あいまいな言葉や概念のみを扱う空疎な科学を追放する、子どもが必ず抱くであろう嫌悪感を引き離す、最初の講義からその方法が既知のものから未知のものへと子どもを導くので、子どもを啓蒙する。子どもの好奇心をかきたてるのである。そして以上のような利点により、たとえ子どもの教育期間が短かったとしても、子どもは助けなしに、自らの力で人が彼に教えなかった知識を獲得することが出来るのである⁽⁴¹⁾。

このように、コンディヤックの教育法においては、単

純化された原理や原則を単に教授することではなく、まずは、子どもに対して観察を課す。そして、これまでに形成されてきた学問体系や技術、あるいは知識といったものを何らの観察なしにただ伝授することではなく、自ら知識を獲得する方法を学び、および、それを素材として自ら思考していく方法の教授に重きが置かれるのである。別様に言えば、自分の世代に先立つ人間たちの手によって作られた社会、制度、あるいは培われてきた技術といった既成のものをそのまま無批判的に受容することではなく、自らの思考を十分に働かせるために必要な知的な態度を涵養すること、および、思考や推論の方法を教授することなのである。端的に言えば、思考することが最も重要な課題であり、判断力、批判的な精神の涵養こそがコンディヤックの教育論においてもっとも重要視されるのである。コンディヤックは、自分の思考を表現する技術の教授を実践していたが、このような、知的な鍛錬は、厳密な方法によって、物事を順序だてて、推論することを可能にする、いいかえれば、理性を正しく導くことであり、誤謬を防ぎ、またそれを矯正する作業でもある。また、他人の理性の基準に即してではなく、あくまで自分の理性の基準に従い、正しい順序に従って、真と偽を見極め論理的な思考や批判的な思考を養成するのである。そして教育者の役割は、子どもが、自分自身と自分自身の能力を意識するように仕向けてあげること、そして論理的思考を技術として確立させることにあったのであるが、このような考察を経て、本論稿を締めくくりにあたって、とりあえず次のように言うことが可能ではないだろうか。コンディヤックの提示する教育法は、上述のような、知的な教育を通して、判断力や批判的思考の涵養を行い、受動的ではなく、能動的に思考する人間を育成することであるということ、すなわち、それは自律した主体あるいは主権者を育成することに他ならないのだ。

おわりに

本論稿においては、18世紀の哲学者コンディヤックにおける教育論を、とりわけ彼がパルマ公国王太子の家庭教師という経験から執筆した『教程』「序論」の「緒言」を主たるコーパスとしながら彼の提示する教育法について論じてきた。もちろん本論稿においては、コンディヤックの教育論をすべて詳細に論じることが出来たとは言えないが、それを、端的に言うなれば、自ら知識を獲得する、あるいはその方法を獲得す

る、そして判断力を養成し、そのような者を通して自律的主体、あるいは主権者の育成をめざすものであったと言えるだろう。そして、このコンディヤックの考えは、その後革命を経て共和制が採用されるフランスの公教育において、特に市民教育の萌芽としてとらえることが出来るのではないだろうかと考える。

フランス革命期においては、国家と教会とを分離すべきという思想を通して、国家と教会のどちらが教育を組織し、管理すべきなのかという重大な問題が生じてきた。従来は宗教的世界観の伝達が教育の目的であり、教会に教育をゆだねるべきだと考えられていたが、自然法を礎にして国家を組織するということが求められるようになると、国家は教会とは異なった独自の国民教育を担うべきと考えられるようになった。宗教的な教理の伝達による教育ではなくて、世俗的な教育、そして同時に、人間の理性を養い、道徳性を形成し、人間を理性的な存在として高めるような教育、あるいは人間の形成にとって普遍的かつ必要不可欠な知識の伝達の場としての教育が必要とされるようになった。加えて、新しい国家が形成されていく中で、市民の教育の必要性を論じる風潮が高まりを見せる。そしてフランス革命後、真の国民教育(公教育)制度が計画されていく。すなわち、民主主義に立脚する近代法治国家にとって、国民の教育機会を保障し、公教育制度を整備していくことが、当然の義務であり、またそれを享受することが国民の権利なのである。言葉を変えれば、国民主権を是とする国家においては、その構成員である国民の才能や能力を、最大限に養成および育成し、発達させることが政治的課題になるのである。

このような18世紀後半以降におけるフランス教育界、とりわけ、公教育が整備される中で、コンディヤックがそれにどのような影響を与え、またその考えがどのように引き継がれているかということについては、稿を改めることとしたい。

【注】

- (1) <http://www.conseil-constitutionnel.fr/conseil-constitutionne l/francais/la-constitution/les-constitutions-de-la-france/constitution-de-1791.5082.html> 最終閲覧日 平成27年8月26日
- (2) 革命期のフランスにおける公教育思想については、コンドルセ他著(阪上孝編訳)、『フランス革命期の公教育論』、岩波書店、2002年を参照のこと。
- (3) ラ・シャロッテについては、ラ・シャロッテ著、古沢常雄訳、『国家主義国民教育論』、世界教育学選集74を参照。ラ・シャロッテは、この著作の中でイエズス会教育の欠陥を批判したうえで、教育が宗教の側ではなく世俗の側によって管理されなければならないという原則、いわゆる教育の非宗教性を基盤とする教育、および、市民的教育の必要性、そしてそのために必要な方法を提言している
- (4) コンディヤックの生涯については、Jean S., *Corpus Condillac (1714-1780)*, Editions Slatkine, 1981 を参照。
- (5) Rousseau J.-J., *Confessions, Œuvres complètes*, tome 1, Paris 1959, p.347
- (6) フランスにおいて2013年より始まったコンディヤック全集の編纂により、資料へのアクセスは、以前に比べるとはるかに改善されつつある。
- (7) 北原敦編、『イタリア史』、山川出版社、2008年、p.328
- (8) Quarfood C., (traduit par Johansson Y.) *Condillac, la statue et l'enfant, Philosophie et pédagogie au siècles des Lumières*, 2002, p.35
- (9) 北原前掲書、p.328
- (10) Quarfood C., *op.cit.*, p.35
- (11) *Ibid.*, p.35
- (12) Lefèvre R., *Condillac ou la joie de vivre*, Editions seghers, 1966, p.63
- (13) 山口裕之、「コンディヤック」、『哲学の歴史』6 知識・経験・啓蒙 18世紀人間の科学に向かって、中央公論新社、2007年、p.547
- (14) Jean S., *op.cit.*, p.68
- (15) *Ibid.*, p.68
- (16) Quarfood C., *op.cit.*, p.282
- (17) *Ibid.*, p.36
- (18) *Œuvres philosophiques de Condillac*, vol.1, PUF, 1947, p.421
- (19) *Ibid.*, p.423
- (20) Lefèvre, *op.cit.*, pp.62-63
- (21) コンディヤック(古茂田宏訳)、『人間認識起源論』(下)、岩波書店、p.319
- (22) *Œuvres philosophiques de Condillac, op.cit.*, pp.409-418
- (23) Halevi R., *Le savoir du prince: du moyen âge aux lumières*, Fayard, 2002, pp.1-7
- (24) *Œuvres philosophiques de Condillac, op.cit.*, p.397
- (25) コンドルセ他著、前掲書、p.446
- (26) *Œuvres philosophiques de Condillac, op.cit.*, p.397
- (27) *Ibid.*, p.397
- (28) *Ibid.*, p.397

- (29) *Ibid.*, p.397
- (30) *Ibid.*, p.397
- (31) *Ibid.*, p.397
- (32) *Ibid.*, p.399
- (33) *Ibid.*, p.399
- (34) *Ibid.*, p.399
- (35) *Ibid.*, p.399
- (36) *Ibid.*, p.399
- (37) *Ibid.*, p.399
- (38) *Ibid.*, p.399
- (39) *Ibid.*, p.399
- (40) *Ibid.*, pp.397-398
- (41) *Ibid.*, pp.398-399

※本研究は、平成26年～28年度科学研究費補助金・基盤研究(B)「体罰の比較文化史研究－暴力なきスポーツ界の思想的基盤構築に向けて」の成果の一部である。